

# ブラジリアン柔術を通じた日本・ブラジルの交流

高橋 健太 (G110004)

指導教員：安念 保昌

キーワード：性格特性、国民性評価、教育期待

## はじめに

スポーツは先史時代から現代まで途切れることなく存続してきた。それは、スポーツに時代や国、文化を越えて広がる普遍性が備わっているからである。今日、社会が複雑化する中、スポーツには社会的意義として①青少年の健全育成、②地域コミュニティの醸成、③経済発展への寄与、④国際交友・親善への貢献が求められている。

多くの外国人が日本で生活し多文化共生が求められる中、岐阜県美濃加茂市にも多くの外国人、特にブラジル人（以下、伯人）が滞在している。美濃加茂市は外国人集住都市会議に加盟し、伯人が日本で暮らす上での諸問題（地域トラブルや、子どもの教育問題、社会保障サービスの遅れなど）に対して取り組んでいる。

そういった美濃加茂市にはブラジリアン柔術道場があり、道場や試合会場では日本人と伯人が交流を深めている。ブラジリアン柔術の起源は日本の古流柔術にあり、日本からブラジルへの移民時代に前田光世によって古流柔術がブラジルへ伝わり、エリオ・グレイシーらがブラジリアン柔術（以下、柔術）へと発展させた。その後、UFCにおけるホイス・グレイシーの活躍によって柔術は世界中に広がった。

## 目的

本研究ではスポーツの時代や国、文化を越えて広がるという普遍性に注目し、複雑化する現代社会でスポーツがどのような役割を担えるのか調査・研究することにした。そこで、国際化が進み多文化共生が求められる美濃加茂市において、柔術がスポーツとして、日本人と伯人の国際交流にどのようにして貢献できるのか、アンケートおよびインタビューの結果から考察することを目的とした。

## 方法

本研究では子どもに柔術を習わせている日本人・伯人保護者、子どもに柔術以外を習わせている、または何も習わせていない日本人・伯人を対象にアンケートを実施し、結果を分析した。また、柔術の道場経営者、中学校長、中学校外国語講師、イベント開催者に日本人と伯人の交流についてどのように考えているのかインタビューを行った。そして、アンケートとインタビューの結果から、柔術がどのような形で日本とブラジルの国際交流に貢献できるのか考察した。アンケート内容は日本とブラジルの交流について（4問）、日本人・伯人に対するイメージ（Big Fiveの重要因子10問）、柔術またはその他の習い事を学ばせている理由（8問）、今後の日本とブラジルの交流に望むこと（4問）を6件法と記述形式で行った。

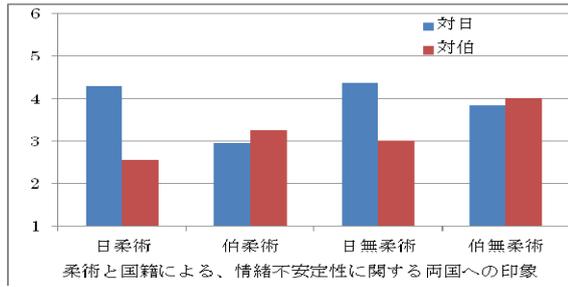
## 結果

以下に主な結果を示した。

### ① 情緒不安定性に関する分析

情緒不安定性に関する印象に違いがあるかを、国籍、柔術を習わせているか否か、対象国の3要因混合分散分析によって分析を行った。その結果、柔術を習わせているか否かの主効果が1%水準で有意であった( $F=11.1$ ,  $df=1/129$ ,  $p<.01$ )。これは、全般的に柔術を習わせることによって、有意に相手の情緒が安定していると認識することを示している。しかし、国籍の主効果は見られなかったが、それらの交互作用が有意傾向となった( $F=3.07$ ,  $df=1/129$ ,  $p<.1$ )ため、下位検定を行った。その結果、ブラジル人において柔術を習わせている群が慣らせていない群に比べて有意に低く、他者（日本人と伯人に差はない）を情緒安定的と

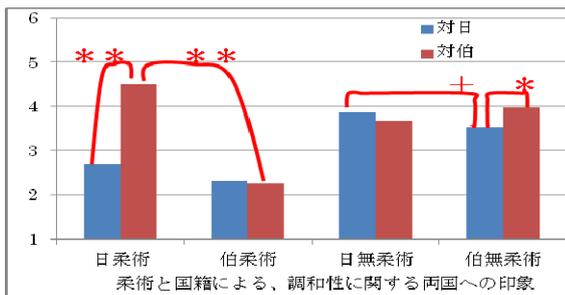
認識していることが分かった(F=25.70)。



## ② 調和性に関する分析

調和性に関する印象に違いがあるかを同様に、3 要因混合分散分析によって分析を行った。その結果、柔術を習わせているか否かの主効果が 1%水準で有意であった(F=52.44, df=1/129, p<.01)。これは、一般的に柔術を習わせることによって、有意に相手への調和性を認識することを意味している。さらに、国籍による主効果も 1%水準で有意と認められ、(F=33.25, df=1/129, p<.01)それらの交互作用が有意傾向となった(F=31.97, df=1/129, p<.1)。これは、日本人が柔術を習わせることで伯人に調和性があると認識していることを示している。

一方、対象となる国籍の違いによる主効果も 1%水準で有意となり(F=18.28, df=1/129, p<.01)、被験者の国籍との交互作用も 5%水準で有意であった(F=6.83, df=1/129, p<.05)。さらに、柔術を習わせているか否かとの交互作用も 1%水準で有意となったため(F=10.35)、下位検定を行った。その結果、日本人に対しては伯人のほうが調和的であると有意に認識し(F=69.14)、一方、伯人に対しては、日本人のほうが協調的であると認識していることが示された(F=37.84)。



③ブラジル文化に親しむためについて同様に、3 要因混合分散分析によって分析を行った。その結果、国籍による主効果が 5%水準で有意であると認められた (F=6.83, df=1/129, p<.05)。また、スポーツの種目における主効果が 5%水準で有意であると認められた (F=6.03, df=1/129, p<.05)。さらに、国籍とスポーツの種目の間に交互作用が 5%水準で有意であることが認められた (F=5.69, df=1/129, p<.05)。これは、伯人においてスポーツによってブラジルの文化に親しむことを求めていることが示された。

④日本・ブラジルの親子の交流のためについて同様に、3 要因混合分散分析によって分析を行った。その結果、国籍による主効果が 1%水準で有意であると認められた (F=8.72, df=1/129, p<.01)。下位検定を行ったところ、伯人が日本人より日本・ブラジルの親子の交流のためにスポーツに取り組んでいることが認められた (F=340.78)。また、柔術を習わせている群は他のスポーツを習わせている群よりも、日本・ブラジルの親子の交流のためにそのスポーツに取り組んでいることが示された (F=381.56)。

## 考察

伯人は日本からの移民を受け入れてきたことや、子どもが望むのなら日本人と交流しても良い、自国の文化で交流したいと考えていることから、日本との交流に対して受身的であると考えられてきた。

しかし、柔術を子どもに習わせている伯人は日本人とスポーツを通してブラジルの文化で交流することや、柔術によって親子の交流を望んでいる。

また、柔術を習わせている伯人は伯人のことを調和性がないと感じている。これは、ルールやマナーが守れず会場を借りることができないという「会場問題」によると考えられる。「会場問題」を解決するため、伯人が日本人に協力を求め、「伯人がもっと日本文化を理解していくべき。」と伯人に問題があると認め、日本の文化を受け入れていく姿勢を示している。

さらに、東日本大震災の際には伯人が企画し、チャリティセミナーや大会を開き、「同じ日本に住むもの同士、助け合う。」と主張した。

以上のことから、柔術を習わせている伯人は、受身的だけではなく、様々な形による日本との交流を求め、活動していると考えられる。

また、柔術を習わせることによって日本人、伯人ともに相手国の人を情緒が安定し、調和性があると認識している。これは、柔術を通して交流することでお互いを知り、信頼関係が生まれたと考えられ、柔術が伯人だけでなく、日本人に対しても影響を及ぼしたと考えられる。

伯人が様々な形での交流を求め中、日本人においても、柔術を通しての日本・ブラジルの交流を望んでいること。「柔術は日本とブラジルをまたぎ、どちらにもなじみがある。」こと。「大人が交流するのは抵抗があり、子どもからきっかけをつくっていく。」こと。以上のことから、伯人が多く住む地域において子どもたちに柔術を習わせ、日本・ブラジルの交流を見出していく方向性が考えられる。

## 修論

本研究では、スポーツの普遍性に着目し、複雑化する現代社会での役割を考えた。その結果、スポーツを子どもに根付かせていくことで、国際交流や多文化共生に貢献できると考えた。

## 参考文献

小野寺理佳, 調査と社会理論, 19(2002), 9396.